ハレバレモンスターSTORY

第１章

第11話　手紙

あの後、泥だらけの服を見てお母さんはビックリしてた。
怒られるかと思ったけど、それはほんの少しで済んで、それよりも花火大会はどうだったの？とか楽しかった？って。
私は夏休みの準備のことも含めてお母さんとたくさん話した。
こんなにたくさん、こんなに笑顔で話せたのはいつぶりだったんだろう。
これもみんなのおかげだ。
あの日リィちゃんと二人で食べたコロッケ、今日はみんなと一緒に。

「きゃっっ！」
校舎に入った瞬間、廊下から誰かが飛び出してきた。
それは手紙を握りしめながら今にも泣き出しそうなリィちゃんだった。

それから登校してきたからみんなが揃うまで5分もかからなかったと思う。
ただ一人ニック君を除いて。

　　みんなへ
まずはこんな形でみんなに伝えることになってごめん。
僕は夏休みを最後に転校が決まっていて、新学期に僕はいません。
この街に来た時から親の仕事の都合でそんなに長くいないってわかってたから、クラスのみんなと仲良くしようなんて思ってなかったし、しないようにしてた。
でもリィさんが誘ってくれて、ハルネさんが「いいよ」って言ってくれて、みんなが受け入れてくれて、本当にうれしかった。
本当はもっと早くみんなに言おうと思ってた、でも言えなかった。

言っちゃうと離れることが決まっちゃうみたいで、別れることを受け入れるみたいでこわかった。
今これを書いているのはみんなと花火をみた夜です。
すごくきれいで、花火を運んだことも、作ったことも、なんの話してるかわかんない時間も、僕にとっては宝物だ。
みんなと一緒にいた1ヶ月はすごくすごく楽しくて。
今まで引っ越すのも転校するのも仕方ないってあきらめてた。
でもね、僕はみんなと一緒にいたい。離れるのはいやだ。
だから1日でも早く戻って来れるように両親を説得し続けてみる。
きっと今までの僕ならしなかったけど、あきらめなかったら今日の花火みたいにいつか叶うかもしれない。
リィさん、一緒にコロッケ食べれなくてごめんね。
いつかぜったいにもどってくるから。
だからみんな、その日まで　またね

ニック

『私、なんであの日走ってでもコロッケ買いに行かなかったんだろう。コロッケは逃げないとか、ニックんが居なかったら意味ないじゃん』

いつも明るくて元気なリィちゃんがうずくまって泣いている。
きっとお母さんとのことがあったから別れに敏感になってるのかも・・
ううん、そんなこと考えてる場合じゃない。
今、大事なのはー

「リィちゃん。リィちゃんはどうしたい？」

『私は、、私は、、、』

『私はずっと待ってるって伝えたい』